

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

— 西鶴の因果話 —

小林 幸夫

(一)『西鶴諸国はなし』の説話

西鶴の作品を読む場合、説話を生み出す発想について考えてみることも、決して無駄ではない。西鶴研究についていえば、説話の創作意図を論じて、創意の独自性を明示しようとすることが多い。もちろん、それも西鶴説話を論じるひとつの方法である。いっぽう、わたしがここで試みようとするのは、どのような発想にもとづいて、説話が作られているか、ということである。その発想がどういう表現をえて、一篇の説話として仕立てられるのか。発想と表現の経緯をここでは考えてみたい。ひとつの西鶴説話をしめしてみよう。

『西鶴諸国はなし』(巻二の一)は、「姿の飛のり物 因果 津の国の池田にありし事」と題されている。空飛ぶ駕籠にのる奇っ怪な女の話である。長いが、話の全体像を理解するために、全文をあげておく。

寛永貳年、冬のはじめに、津の国池田の里の東、呉服の宮山、きぬ掛松の下に、新しき女乗物、誰かは捨置ける。柴刈童子の見つけて、町の人に語れば、大勢集りて、戸ざしを明て見るに、都めきたる女良の、廿二、三なるが、美人といふは是なるべし。黒髪をみだして、すゑを金のひらもと結をかけ、肌着はしろく、う

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

へには、菊梧の地無の小袖をかさね、帯は小鶴の唐織に、練の薄物を被き、前に時代時絵の硯箱の蓋に、秋の野をうつせしが、此中に御所落雁、煎櫃、さまぐの菓子つみて、剃刀かたし見へける。「御かたは何国、いかなる事にて、かくお独りはましますぞ。子細を御物語あるべし。古里へおくり帰して参らすべし」と、いろく尋ねけれども、言葉の返しもなし。只さしうつむきてまします。目つきもおそろしくて、我先にと家にかへりぬ。

「今宵そのまゝ置なば、狼が浮目を見すべし。里におろして、一夜は番をして、朝は御代官へ、御断りを申べき」と、また山にのぼれば、彼乗物は、一里南の、瀬川といふ宿の、砂濱に行ぬ。既に日も暮て、松の風すさまじく、往来の人も絶て、所の馬方四、五人、此女良をしのび行て、うき世の事どもを語りつくして、「情」といへど、取あへずまじませば、荒男の無理に、手をさしてなやめる時、左右へ蛇のかしらを出し、男どもに喰付て、身をいためる事、大かたならず。何れも眼くらみ、気をしなひ、命を不思議にのがれ、其年中は、難病にあへり。

其後はのり物、芥川にありともいへり。また松の尾の神前にも見へ、つぎの日は、丹波の山ちかく行、片時も定めがたし。後にはうつくしき禿に替り、または八十余歳の翁となり、或は顔ふたつになし、目鼻のない姥とも成、見る人毎に、同じ形にはあらず。

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

是に恐れて、夜に入里の通ひもなく、世のさまたげとなりぬ。

此事しらぬ旅人、夜道を行に、おもひもよらぬ乗物の棒、肩をはなれず、奇異の思ひをなしける。されどもすこしも、重からずして、杓町計もすぐると、俄に草臥出て、たやすく足も立ず、難義にあへる。陸縄手の、飛乗物と申伝へしは、是なり。慶安年中迄は、ありしが、いつとなく絶て、「橋本・狐川のわたり」に見なれぬ玉火の出し」と、里人の語りし。

いふならば正体不明の化女に崇られる話といつていい。この美しい女は、化女となって里人を悩まし、橋本・狐川のあたりに玉火となつて現れたのである。狐川の玉火であれば、それは狐火、怖ろしい鬼火といつていい。一篇の話としてはけつして上出来の作ではない。むしろ、どこがおもしろいのか。何のために書いたのか。その意図をつかみかねる。とりわけ「津の国の池田にありし事」というこの話を、「因果」と名づけた意図がわからない。その疑問をどう読みとくのか。発想の現場まで下りていつて考えてみたい。

『西鶴辞典』には、この話の典拠が示されている^①。しかし、それらの書物が、典拠といふるかどうか、いかにもおぼつかない。何よりも西鶴がそれらの書物を見ることができたのか、どうもそれさえ不明である。典拠さがしよりも、むしろ本文のなかにその手がかりを捜すべきだろう。そこで注目したいのは、この話の舞台となる摂津の国池田の里、「呉服の宮山」である。『摂陽郡談』によれば、「きぬ掛松」として、こんな説明がある。

池田村呉服宮より良の山頭にあり。社家記に云く、呉織・穴織の二女神、呉国より我朝に至つて爰に於いて絹を繋て、裁縫の道を知らしむ。其の末葉を残し植て、絹繫松と云へり

「呉服の宮山」とは、呉服神社のこと。裁縫の道を伝えた呉織（くれはとり）・穴織（あやはとり）の二神女を祀るという。呉織・穴織の二神女が、この松に絹を掛けたと伝えている。他にも池田村には、

「唐船淵」（二神女が唐よりこの水門に着船したと伝える）、「染殿井」（二神女がこの井戸にて糸を染め、裁縫をしたと伝える）、「織殿旧蹟」（二神女がここで絹を織りはじめたと伝える）などの伝説地がある（摂陽郡談・摂津名所図会）。

本稿では、縁起、謡曲などに見える縁起説話と和歌説話を、「くれはとり」の伝承説話と名づけて、西鶴の因果話が仕組まれたいきさつを考えてみたい。

（二）「くれはとり」の縁起

この因果話のなかに「くれはとり」ということばは見えない。だが、「津の国池田の里の東、呉服の宮山、きぬ掛松の下に」と冒頭にあるように、話は、池田の里、「呉服の宮山」から始まる。ここを舞台とすることで、西鶴は「くれはとり」の伝承をはのめかしているかのようである。

北村季吟「増山井」は、「呉服祭」を説明して、池田の里、呉服神社の祭の来歴をかたっている。

十八日。あやは祭は十七日也。津国池田にあり。応神天皇の御宇、阿知使主を呉国につかはし、工女をもとめ給ふに、兄媛・弟媛・呉織・穴織、四人の女をまいらせたり。兄媛は筑紫の胸形太神に奉れり。其三女は津の国にいたるよし、日本紀にあり。かの穴織をあやはとりといふなるべし。

日本紀にあり、として応神天皇の御宇、呉国より工女来たり、裁縫の道を伝えた由をいう。その二神女を祀るのが、呉服神社の呉織（くれは）祭・穴織（あやは）祭である。「きぬ掛松」は、二神女が、ここに絹を掛けたと伝えるところである。もちろん西鶴は、この一話を呉服神社の縁起として書いたわけではない。あくまでも池田呉服神社にまつわる一篇の奇譚を書き記したのである。その奇譚の生まれる所

以を問う前に、今しばらく呉服神社の来歴を追いかけてみよう。

『呉織漢織大明神略縁起』は、仮名と真名の二写本が伝わり、慶長年中に漢織神社神主が撰述したもの。この縁起については、伊藤正義氏が、謡曲『呉服』を紹介した一文がある。詳細についてはそれによりたい。元来、この略縁起のもととなる往古縁起（絵伝二巻）が、大永年間の兵乱で焼失したため、中古縁起として書き改められた。しかしそれも天正の兵火によって焼かれたため、慶長に到って略縁起二巻が作られたのである。往古縁起とは、漢織・呉織・猪名津彦三社の創建縁起をいう。ここには多和文庫蔵の仮名略縁起の一部を示して、その概要を説明しておく。

応神天皇三十七年、春二月の比、天皇もおもほし給ふは、我國神代蚕を養、綿をつみ、糸を引、麻を殖、紡績絹布を織る道はありといへとも、裁縫の道明ならず。今呉国裁縫の上手あり。これを召て裁縫の術を盛せんとて、阿知使主、都加使主と申す二人を使者として呉国に遣し縫工女を求たまふ。……高麗国王より久礼波・久礼志といふよき案内者二人を添られたり。……さて呉王より兄媛・弟媛・呉織・穴織といふ四人の縫工女ををくられたり。呉国より織女が渡来したことは、『日本書記』（応神記・雄略記）に見えているが、縁起の叙述は、必ずしもそれにしたがったものではない。中世の歌学の所説や謡曲が、この縁起の叙述に反映している。縁起によれば、「呉織穴織は神女也。天照太神の變作なるべし」とある。變作とは、變化、権化のこと。すなわち、天照大神が、女神とすがたを変えて、あらわれたもうたというのである。のちにこの呉織（くれはとり）・穴織（あなはとり）の二神女は、託宣にしたがって呉服の里、宮山に呉織社・穴織社と祀られた。つづいて、呉織穴織は神女也。天照太神の變作なるべし。夜々御身より光明を放て女巧を勤給ふ。御一代百余歳、燈をもちひたまはず。いと不思議なる事也。天皇より始めて万民に至るまで感ぜずといふこと

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

なし。古哥に

くれはとりあやに恋しくなりしかは二村山もこえずなりにきとよめるも、此神のあやをり給ふ事をよめるなるへし。千早振神代には木皮藤かづらをあつめて着しけるを天照太神より絹布はしまり人民の寒暑の苦を救たまふ。されは神衣祭に和妙衣荒妙衣を供祭も此故也。これを神服といふ。

と述べて、この二神女が綾織りのはじめであることを語る。「和妙衣・荒妙衣」を神前に供える神衣祭の由来も述べられる。綾織りの技を伝えた神女に神の衣が供えられる。縁起は、「くれはとり」の和歌を引いて、この二神女が、綾織るはじめと述べている。これは付会の説ではあるが、二女神を讃仰して、機織りの技を伝えた神女への思慕の情をかたっているといっている。

(三)「くれはとり」の恋歌

この「くれはとり」の和歌の素性をたずねてみると、なかなか由緒ただしき一首であることがわかる。『後撰和歌集』（巻第十一・恋）に収められた藤原諸実の恋歌である。その詞書はこうなっている。

おほやけ使にて、東の方へまかりける程に、はじめてあひ知りて侍る女に、「かくやむごとなき道なれば、心にもあらずまかりぬる」など申て下り侍り侍けるを、後にあらため定めらるゝ事ありて召しかへさりければ、この女聞きて、喜びながら、とひにつかはしたりければ、道にて、人の心ざし送りて侍ける呉服といふ綾を二むら包みてつかはしける

勅命によって東に赴くこととなった男が、途中、両村山（ふたむらやま）あたりで召し返されて、喜びのあまり女のもとへ、二村（二反）の綾に歌を添えて送った。

くれはとりあやに恋しくありしかばふたむら山も越えずなりにき

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

これに対して女の返歌は、やはりふたむら山を詠み込んだもの。

唐衣たつを惜しみし心こそふたむら山の関となりけぬ

あなたとの別れを名残惜しく思つたわたしの心が、あなたを両村山でせき止める力となったのでしよう、という。かくして「くれはとり」「あや」、そして「両村山」に託して、男女の恋情が歌われる。「二村山」は、三河の国にある山。歌枕でもある。絹織物二村（二反）の意味を兼ねる。由緒ただしい和歌であるといったが、「くれはとり」は歌語として、さまざまにその語義が論じられて、和歌はもちろん、連歌の世界にもその所説は受け継がれてゆく。それについては伊藤正義氏の早く指摘されたところである。

「くれはとり」「あや」「両村山」、いずれも「衣」にゆかりのことばであるが、「くれはとり」の語義は、歌学書のうちにつきのよう

に説かれている。『梵灯庵袖下集』から引いてみる。
呉服と申事、是は大国に有。あやおりし女ありき。君のめしにしたがひて、大内へまいりける。此女房は兄弟ありけり。さるほどに、君の御意にまかせてあやおる事、心もこと葉もおよびがたし。此兄弟の女房、呉の国より参りたる女なればとて、あねをばくれは鳥、いもとをあやは鳥とは名を付給ふ也。兄弟の名に任せて、哥道には、くれは鳥あやとつづけはする事有。

呉服の発句、

くれはとりあやめは明日の軒ばかな

くれはとりあやしや雪か峯の雲

「くれはとり」の語義が、綾織りの故事にこと寄せてかたられ、さらに「くれはとり」は、「あや」をみちびく歌ことばとされている。「くれはとり」は、「綾を織る女」（梵灯庵袖下集）のこと。呉の国に機織りのわざにすぐれた姉妹がいて、姉を「くれはとり」、妹を「あやはとり」といった。その評判が叡聞に達して大内に招かれたという。「呉」と「綾」が対になって、姉妹とされたのである。「くれはとり」

は、「あやに恋しき」「あやにく」「あやし」などの枕詞として用いられ、恋の情をあらわしもした。たとえば『新勅撰集』（恋・二）の崇徳院の歌「恋ひ恋ひてたのむる今日のくれはとりあやにくに待つほどぞひさしき」は、待たされて焦れている女の気持ちを歌っている。

「くれはとり」の歌語は、連歌の世界にも受けつがれる。室町期の連歌学書『流木』は、「あやに恋しき」を恋の詞として、「くれはとり」の和歌を解説している。

一、あやに恋しき あやにくに恋しき也。万葉にも、夕さればあやに恋しきと云ふ長歌有り。

くれは鳥あやに恋しく有りしかば二村山も越えず成りにき
此の歌、参河守に成りて下りける人、あらためらる、事有りてのぼりける道にて、人の心ざし贈りけるくれはとりと云ふあやを、ふたむらつ、みて京なる女に送るとてよめる歌也。参河に二村山あれば也。京なる女あやにくに恋しくて、二村山も越えず帰りにけると云ふ歌也。あやふたむらとは二足也。絹錦など一むら二むらと云は、一足二足也。

女を慕わしく思う心が、あやなす絹織りの衣に託して歌われる。

「あやめ知らぬ恋もするかな」（古今和歌集・四）とも歌われるように、「あや」は、思い乱れる恋の心をあらわすことばでもある。いまかりに「くれはとりあやに恋しく」の歌を、「くれはとり」の和歌説話と名づけておこう。それは「くれはとり」という綾織りの衣に託した恋歌の説話である。そして「くれはとり」は、恋の心を詠う歌語として、和歌から連歌の世界に伝承されてゆく。

（四）「くれはとり」の連歌説話

すでに見たように「くれはとり」は歌語として連歌の世界へも受けつがれてゆく。『連珠合璧集』には、

くれはとりアラバ、又あなはとり、二人の名也。仁徳天皇の御時、呉の国よりきたれるきぬ、い也。

あや きぬをぬふ 二むら山 難波宮

とあって、右のような寄合の語があげられている。また『藻塩草』（巻十八）にも「綾」が立項されて、呉国の織姫の故事があげられている。それならば「くれはとり」の歌語を用いて、連歌の座をかこみ、俳諧の連歌に遊ぶこととなる。つぎの『竹馬狂吟集』の付合いがそれである。

あやしや誰に借りてきつらん

この小袖人のかたよりくれはとり

この俳諧の遊びは、よほど人氣があつたらしくこれに類する付合いが、つぎの三書にも記録されている。

①『月庵醉醒記』

宗長、いろ／＼しきいでたちにて、兼載に途中にしてあひければ、

あやしやさてもたれにかりきぬ

このこそで人のかたよりくれはとり

兼載

宗長

②叡山真如蔵旧蔵本『俳諧連歌抄』

兼載、いつよりも衣装など引つくるひ給ふ時、ある人

あやしや御身誰にかりきぬ

このこ袖人のかたよりくれは鳥

兼載

③新旧狂歌俳諧聞書

宗祇、連歌の座敷へあやの小袖を着てゆきければ

あやしやたれにかりきぬの袖 宗長

此小袖人のかたよりくれはとり

宗祇

連歌師の固有名詞は変わっても、連歌に大きな変化はない。どの句

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

も兼載であり、宗長であり、宗祇である必要はない。いずれも名前を自在に入れ替えた連歌説話である。大事なものは、「くれはとり」ということばである。この語は、和歌・連歌以来の伝統をもつ歌語である。それを用いての俳諧の連歌であるところに、この付合の作意はある。

ここにしめした付合いは、小袖の貸し借りを、男女の恋の模様に取りなしたのである。ここに「くれはとり」という歌語のはたらきがある。それをいかした俳諧の連歌である。「くれはとり」が「あやに恋しき」をみちびく枕詞であれば、この「くれはとり」の連歌説話は、恋の気分をおびてくる。綾の小袖を着てあらわれた宗祇に「おや、誰から借りた衣ですか」と尋ねた宗長に、「じつはこの小袖、訳ありの女がくれたものなんです」と答える宗祇。そんなやりとりとして読むこともできる。少しにやけた宗祇の表情を想像してみるのもおもしろい。こんな愉快な俳諧の連歌に遊ぶのは、おそらくつぎのような連歌の座と考えるのがふさわしい。

あやにくに慕ふを春や帰るらん

咲き散る花の二村の山

『竹林抄』（春）の能阿の句である。もちろん、「あやにく」に「二村山」を付ける付合いには、『後撰集』の恋歌が踏まえている。このような連歌の席の遊びとして、「くれはとり」の歌語をもとにして、右のような俳諧の連歌に興じられたにちがいない。この連歌説話も、連歌や俳諧の座に伝えられた「くれはとり」の伝承説話といっている。

(五) 謡曲『呉服』と女神への恋慕の情

あらためて冒頭にあげた西鶴説話に立ち戻ってみよう。ここではかりに西鶴が「くれはとり」の縁起説話や和歌説話、そして連歌説話を総じて「くれはとり」の説話伝承と名づけておこう。かりに西鶴が

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

「くれはとり」の説話伝承を知っていたとしても、そこからすぐにあんな因果話はうまれてこないだろう。繰りかえすがこの一篇の冒頭は、「津の国池田の里の東、呉服の宮山」から始まる。「なにわのくれはとり」(『西鶴織留』)と称された西鶴ならば、呉服社の縁起について、およそ承知のうえで、冒頭の一節を書きはじめたにちがいない。もちろん俳諧師であれば、歌語「くれはとり」の知識は、耳袋にたくわえられていたと思う。だとすれば「くれはとり」の説話伝承から発想を得て、「津の国池田」を舞台にした話をこしらえあげたと考えられる。もちろん、それは和歌説話のような恋歌の説話ではない。また、俳諧味のある連歌説話でもない。あくまでもそれは因果話である。しかし、近世生まれの因果話が仕組まれるには、なお一段の飛躍が必要である。その跳躍台となったのが謡曲『呉服』であろう。これは「くれはとり」「あやはとり」の織姫が、治まる御代を、舞によってことほぐ、天女の舞の一曲である。アイ狂言では、所の男(アイ)が登場して、呉織・漢織渡来のこと、そしてこのふたりが神として祀られる次第を物語る。

アイ「この所を摂州呉服の里と申すは、昔人、人王十六代応神天皇の御宇に、唐土より呉織漢織と申す二人の織女を日本へ渡し申し候。当国この浦へ唐船着き、すなはちこの所へ二人共におん上りなされ候ふを、やがて奏聞申し候へば、御感斜めならずして、この在所において機物を立て、御衣を織り供へ申せとおん事にござ候ふ間、すなはちこの所に機物を立て申し候。また漢織と申し候ふは、綾の紋を織りあらはし、呉織は糸を取り引く木をくれはと申すによつて、呉織と申し候。しかるに二人の織女互ひに御衣を織り立てて毎月捧げ参らせ候。かやうの事もこの君賢王にてござ候ふゆゑ、わが朝の事は申すに及ばず、唐土までも靡き従ひ申し候。まことに天下泰平に治まり来たり候ゆゑに、今の世までも二人の織女を、くれはあやはの明神とて、両社に勧請申され

候ひて、われらごときの者まで渴仰申すおん事にて候。」

アイがここに語るのは、呉織・漢織両社の縁起である。謡曲は縁起を取り込んで祝言の一曲を作りあげたのである。さらに謡曲は、「くれはとりあやに恋しくありしかば」の和歌を引用して、

されば二人の名に寄せて 呉織 あやとは申し伝へたり しかればわれらは唐人なれば、大和言葉は知らねども 呉織あやに恋しくありしかば 二村山と詠みし歌も 二人を思ふ心なり

と、こんなふうにかたる。この和歌は、呉織・漢織の二人の織姫を、里人が慕わしく思っている証拠だ、というのである。女を慕わしく思う恋の歌が、呉服・漢織二女神への讃仰の心に転じられている。謡曲は「呉織あやに恋しくありしかば」という恋の歌を転じて、二神女への思慕の情をあらわしている。都の女への恋情から、神女への思慕へ。ここに意味の転換がある。しかし、謡曲『呉服』からすぐに西鶴の因果話が生まれた、と考えるのは、やや無理がある。「くれはとり」の神女への思慕の情を、近世ぶりの因果話に転じるには、もう一段の発想の転換が必要となる。

(一六) 男山の女郎花塚

そこであらためて考えてみなければならぬのは、この怪しい駕籠が「橋本・狐川」に止まって、往来の人を悩ませるというくだりである。

橋本・狐川のわたりに、見なれぬ玉火の出し」と、里人の語りし「玉火」とは鬼火のこと。この女の恨みを表現しているといっていた。橋本は男山八幡宮の麓、淀川の泊まりとして、中世には栄えていたし、近世には遊廓もできた。狐川は、淀川の支流をいう。このくだりだけでは、駕籠が橋本に止まった理由はわからない。しかし、橋本が舞台となるとすれば、なにかここにもいわれがあると考えられる。男山といえは、「男山の女郎花の執心」(『俳諧類松集』巻六「女夫

(メオト)の項)が連想される。ついでに言えば、「女郎花」の付合語として「男山」「古塚」「衣織姫」、そして「頼風」があげられている。ここにあげられた付合語からは、小野頼風の悲恋譚が連想される。男山には、頼風ゆかりの女郎花塚が残っている。「藻塩草」(巻八)からその説話を引いておこう。

平城天皇の御時、小野頼風かと云人あり。八幡に住人なりける。京に女を持ちて、たがひにかなたこなたに行かよひけるに、ある時京の女のもとに行て、いつくの比はかならずちぎりてかへりぬ。そのうち女待けれども来ざりければ、男の八幡の宿所になづね行てとふに、家なるものこたへていはく、この程はじめたる女房のまします所にゆき給ふとこたふ。此女うらめしと思ひて、八幡河のはたにゆきて、山吹襲の衣をぬぎすて、身を投げて死にぬ。男行けるに、家の女の云、京の女房のおはしつるが、かへり給ぬと云ふ。男あはて、おひ行くに、川の端に山吹襲の衣あり。かの女のつねに着たる衣也。あやしみ見れば、河の中にかの女死てあり。女をば取りあげて孝養して、かの衣を取りてかへりかたみにこれを見る。男、宮仕へによりて、京にひさしくゐたりけるに、かの衣を見むと思ひて、取りにやりたりければ、この衣、土に落ち朽ちて女郎花となる。つかひかへりて此よし云ければ、頼風ゆきて見るに、女郎花さき乱れたり。頼風、花のもとへ寄りんとすれば、此花恨みけるけしきにこそ、かたへなびく。男、立ち退けば、また起きをり、此事をいへる也と云々。

小野頼風の心変わりを恨んだ京の女が、八幡河に山吹襲の衣をぬぎ捨てて身を投げた。その衣が朽ちて、一本の草花を生じた。それが女郎花であったという。女郎花が「くねる」のは、頼風を恨む風情であるというのである。それをして「男山の女郎花の執心」(『俳諧類集』)という。

この頼風説話は、古今注(たとえば三流抄)や謡曲にも見えている。^③

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

それによれば頼風も川に身を投げてむなしくなる。こうして男山の「女塚」「男塚」の女郎花伝説は語られてきた。この説話もまた、女の執心を伝えている。

この恨む恋の悲話にも、衣が大切な道具立てとなっている。山吹の襲は、女の残した形見であり、朽ちてそれは女郎花となった。女の残した襲が、山吹であることにもいわれがあるにちがいない。一条兼良の『連珠合璧集』には、

山吹トアラバ、八重山吹

花色衣 おへどこたへず 口なし

という寄合語があげられている。もちろんこれらの寄合語には本歌がある。僧正遍昭(良峯宗貞)の、

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへず口なしにして(古今集)がその歌である。死んだ女の残した山吹襲は、「とへどこたへず口なしにして」とばかりに、執心の色であり、恨みの衣である。

それならば化女の乗った駕籠が、男山の麓、橋本に止まったのも、けつして理由のないことではあるまい。むしろ女の「恨み」を表現する舞台として選ばれたのであろう。女の恨みが、橋本の「玉火」となつてあらわれるのも、「女郎花の執心」を思えば、むべなるかなである。

(七) 謡曲『砧』と因果の妄執

西鶴の因果話を論ずるとき、もうひとつ謡曲『砧』を逸することはできない。留守宅に残された妻は、都の夫へ、わが想い届けとばかり、蘇武の故事を思いながら砧を打つ。『砧』はこんなふう語られる。

万里の外なる蘇武が旅寝に、故郷の砧聞えけり。わらはも思ひや慰むと、とてもさびしき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候。

衣のゆかりから、「とてもさびしき呉織、綾の衣を砧に打ちて」と

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

いったふうに、呉織、綾、砧と、衣にゆかりのことばをかさねて、夫への思慕の情が綴られてゆく。嘆きのあまり病床に臥したまま、むなしくなった妻は、帰国した夫のまゑに亡霊としてあらわれる。つぎの一節は邪淫の罪により地獄に堕ちた妻の、責め苦のさまを語るところ。シテ(クドキ)さりながらわれは邪淫の業深き、思ひのけぶりの立居だに、安からざりし報ひの罪の、乱るる心のいとせめて、獄卒阿防羅刹の、答の数の隙もなく、打てや打てや報ひの砧、恨めしかりける、因果の妄執。(地謡)因果の妄執の、思ひの涙、砧にかかれば、涙はかえつて、火炎となつて、夫の不実をばげしく責めて、恨みの砧を打った報いは、因果にも今、獄卒阿防羅刹の答となつて、妻の身を打つ。こうして「因果の妄執」が語られる。砧の音は、夫に省みられない妻の恨みの声でもある。

『呉服』の場合も、砧の音に恨みの声が託される。呉織・漢織の二女神は、治まる御代をことほいで舞う。

この君の 畏き代ぞといふなみに 声立て添ふる機の音 錦を織る機物の中に 相思の字をあらはし 衣摺つ砧の上に怨別の声 機織る音は「相思」の思いをあらわし、砧は「怨別の声」をかたる。もちろんこの一節には、謡曲『砧』の語りが交響している。『謡抄』は、『和漢朗詠集』(巻上・秋)を引いて、『呉服』のこの一節を注釈する。

朗詠ノ上巻ニ云ク、錦ヲ織ル機ノ中ニ已ニ相思ノ字ヲ弁ヘ、衣ヲ摺ツ砧ノ上ニ俄ニ怨別ノ声ヲ添フ。上ノ句ハ、オットノ遠国ニ行テ年月帰ラザルヲ、其ノ妻ノ限り無ク思フヨシヲ廻文ノ詩ニ作リテ、(中略)

下ノ句ハ、夫ノ胡国ニ行テ久シク帰ラザルニ、其ノ妻秋ゴトニ衣ヲ摺テ帰リ来ラバキセント待ツ也。帰ルコトヲソキホドニ、砧ノヲトモ恨ミ声ニ聞ユルゾ。

上の句は、遠国に赴いて帰らぬ夫のために、妻が恋慕の廻文詩を作

り、錦に織り夫に送った故事。下の句は、蘇武の妻の故事である。いずれも砧の音に、別れを恨む声を託している。

このように『呉服』では、恋慕怨恨の情が、哀切な砧の音にことよせて語られる。ことに『砧』は、「因果の妄執」をいって、妻の怨恨の情が語られていることに注意したい。『呉服』には、恋慕怨恨の一曲『砧』が響きあっているようだ。西鶴は、砧に怨恨の情を託して、因果話の趣向としたのである。それによって神女を思慕する『呉服』の語りは、近世風の因果話に転じられたのである。こうして恋の恨みに狂った化女が、「呉服の宮山」にあらわれる話が生まれてきたのであろう。

(八) 因果の奇譚

それでは西鶴は、「くれはとり」の説話伝承から発想を得て、『呉服』と『女郎花』を利用しながら、どのように因果話を作りあげているか。その表現をたどってみよう。まず、話の舞台が、「津の国池田の里の東、呉服の宮山きぬ掛松の下」から始まるのであれば、読者は呉服社の神女のことを連想したにちがいない。もちろん西鶴の念頭にもそれはあつたはずである。それならば、「都めきたる女良」は、呉服社の神女、織姫(たなばたつめ)の生まれ変わりといっている。「くれはとり」の神女が、近世ぶりの女に見たてられたのである。この美しい女は、

黒髪をみだして、すゑを金のひらもと結をかけ、肌着はしろく、うへには、菊梧の地無の小袖をかさね、帯は小鶴の唐織に、練の薄物を被き、

というふうな、目もあやなる衣裳に身を包んで駕籠に乗る。この女に情けを迫る馬方もいるが、なんと女は怖ろしい化女であつた。さまざまに変化して里人を悩まし、祟るのである。この美女の乗る駕籠が、

「橋本・狐川のわたり」に止まって、「見なれぬ玉火」が出たという。恨みをのんで死んだ女の、怖ろしい玉火である。

怖ろしいことに、この美女の面相がいくらも変化する。

後にはうつくしき禿に替り、または八十歳の翁となり、或は顔ふたつになし、目鼻のない姥とも成、見る人毎に、同じ形にはあらず。

いかにも奇っ怪な、怖ろしい女である。なにゆえに美しい女が、魔性の化女に変化するのか。しかし、これも、つぎの描写と考え合わせれば、およそ了解はできる。

荒男の無理に、手をさしてなやめる時、左右へ蛇のかしらを出し、男どもに喰付て、身をいためる事、大かたならず。

交情を迫る男たちに、その本性をあらわす。挿絵には二疋の蛇が、駕籠から鎌首を出しているのが描かれる。蛇は、女の恨み、執心のかたちである。恋の恨み、妄執ゆえに、変化とかたちを変えた女のすがたがここにある。恋に狂った女の因果話として、この一篇は作られたのである。前述したように、この因果話は、「くれはとり」の説話伝承と「女郎花」の悲恋譚を下敷きにして仕組まれたのである。

それではこの飛び乗り物、女の乗る駕籠は何なのか。空飛ぶ駕籠とはいっても、けっして荒唐無稽な発想ではあるまい。神が御輿に担がれて遊行するように、化女は、駕籠に乗って、自在に移動する。芥川にあり、松尾大社の神前にも見え、丹波の山にも飛ぶ。駕籠は、神の御輿の、近世ぶりの見立てと考えればいい。この駕籠の担ぎ棒も、夜道に行く旅人の肩に取り憑いてはなれない。祟りなす化女の駕籠である。美しい神女の織姫は、こうして怖ろしい変化の魔女に転じられている。こうして西鶴は、恋に取り憑かれた女の妄執のかたちを、「くれはとり」や「女郎花」の伝承説話を下敷きとして作りあげたのである。ここに歌語とその由緒・来歴を語る説話から、新たな説話・咄が作られてゆく道筋が見てとれる。そのことの意味あいについては、また別

「くれはとり」と「女郎花」の説話伝承

の機会に論ずるとして、西鶴という俳諧師が、歌語を咄の種として、新たな説話を作り出していたことを記しておこう。

〔注〕

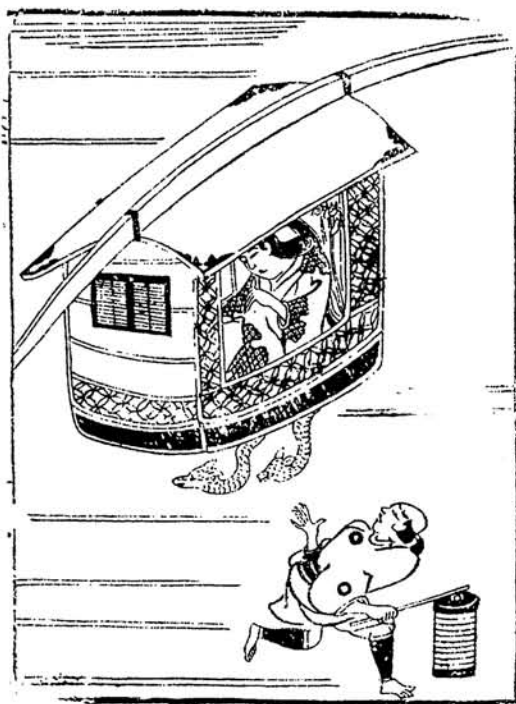
(1)『西鶴辞典』は、以下の記事を典拠としてあげている。

・『近江国輿地志略』(巻二四「志賀郡一九」聖女塚)・(巻八九「伊香郡二」淨信寺)。

・『溪嵐拾葉集』三七等)。

・『義残後覚』巻七ノ一〇「女房の手の出世に京へ上る事」。

(2)(3)(4)(5)いずれも伊藤正義氏『謡曲雑記』(呉服)による。のちに『謡曲入門』(講談社学術文庫)として再刊されている。



『西鶴諸国はなし』(巻二の一)